

『あまやかに蝶は濡れ ～バタフライ・ブルー～』

著：崎谷はるひ

ill：冬乃郁也

「あなたの好みのタイプは少女じゃなくて、大人の男ですよネ？」

ずっと血の気の引く諒。見透かされている気はしていた。なんだかんだと同じ家にいたのだ。彼に見惚れることは何度もあったし、そのあと目があったことも。

(バレてた)

とっさに立ちあがり、あとじさろうとして、手首を掴まれる。逃げられない。寓護の視線は一度として諒から離れない。

「出ていきたいのはそれもありますよね」

「も、申し訳……」

「謝る必要はなにもありませんし、ぼくもやぶさかではないので」

諒は一瞬、固まった。やぶさかではない、とはどういう意味だと目を瞠る。もしや自分の知らない意味があるのか？ しかし寓護の手は緩まず、ひんやりとして見える印象とは違って、ひどく熱い。

脈が、ひとつ大きく跳ねた。ごくりと喉が鳴って、かすれた声を出すのが精一杯だ。

「お、お子さんまでいるのに？」

「あまり性別にこだわりはないんです。好みであれば問題ないですし」

「おれが!? こんな、どこにでもいるようなのが!？」

見た目も性格も、技能だって本当にふつうだ。このとんでもなく高級な男に好かれる要素などなにもない。ぎょっとしてかぶりを振ると、彼は目を丸くし、そのあとふっと笑った。

「いまから大変性格の悪いことを言いますが」

「は？」

「ぼくの周囲には、いわゆるふつうのひと、というのが存在しません」

なにを言いだしたのかと諒が怪訝に思っていれば、寓護は諒の手首を掴んだまま、つらつらと言っただけ。

「元妻は元モデルで女優でしたし、いここは歌舞伎町の帝王とまでいわれたホストですし、聖はあのおり美少女です」

「はあ」

言いきるんだ、親馬鹿。……とは思いますがしかし聖はじっさい、美少女である。

「まあほかにも、仕事関係でもいろんな意味で圧もクセも強い人間ばかりです」

「それは……そうでしょうね」

とんでもない大きなグループの代表だ。きっと諒には想像がつかない世界で生きているのだろう。頭にあの、ホワイトナイトのニュースが浮かびあがった。あの件と関係がないとは思いうけれども、なにかしらの利害が伴えば、弱点を突いてくるのは必至。

（このひとだけなら、きっと身を守れるんだろうけど）

まだ幼い娘だ、四六時中そばにいるわけにもいかない。どれほど気をつけていても、先日のような事件が起きないとも限らない。ただでさえ激務のうえにそんな危機感もあるだなんて、とんでもないプレッシャーではないだろうか。

知らず、眉根が寄った。涼しい顔をしていても、寓護も人間なのだ。疲れもあって当然で、だから諒のようなたいしたことない人間にでも、娘を守るためなら頭をさげるのだろう。

案じるような目になっていたのかもしれない。寓護は、苦笑して諒の手首をそっと親指で撫でた。性的なものは含まれない、やさしく宥める手つきだった。

「そのなかで、見ず知らずの子どもが危ないからと、自分が無謀にも飛びこんでいく人間はいなかったんですよ」

「……ただの考えなしですよ」

口を開いた彼は、皮肉まじりに言ってみせる。同情するんじゃない、と諒が自虐を試みれば「そうかもしれませんねえ」ときた。

「それで就職も住居も、ご破算にしかかって」

うるさい、と顔をしかめ、腕を離せと振ってみる。しかし寓護はどうあっても、手を離そうとはしない。傷めていないほうの腕で、けっして痛くはないのに、その力は強い。

「倒れかけてるのに、あなたときたら、聖に『だいじょうぶ？』って笑ったんですよ」

「そう、でしたっけ」

「おひとよしだなあ、と思いました。危なっかしいなあとも」

覚えていない、無我夢中で。だが諒の返答などどうでもよさげに、寓護は言った。

「ぼく、そういうひと、好きなんですよね」

一瞬、間があった。こんなハイスペックな男に好きなどと言われたらときめくだろうなと、夢想したこともあった。

現実には、びっくりするくらいにときめかなかった。なにしろ言葉にも目にも、恋愛熱量はいっさいない。なんなら聖のほうがまだ、好意の度合は強いくらいだ。

「なんだか、微笑ましくて好ましいです」

「それは……なんと言いましょうか」

ラブとかライクではなくインタレストとか、キュリオシティのほうではないだろうか。いわゆるネットミーム的にいう、「おもしれー男」認定というやつか。

（どう返答したらいいもんか、これ）

散漫に思うものの、寓護の体温と香水の匂いが近くて考えがまとまらないのがじっさいだ。テンション低いまま、色気を垂れ流しているのはやめていただきたい、と諒はぼんやり思う。

「まあそれになにより、聖がなついていますし、いなくなったら寂しがるので」

「……娘さんのために色仕掛けですか」

もはや考え疲れてしまって、脳直の言葉が飛び出した。いくらなんでも失礼か、とあわてたのに、しばしきょとんとなった寓護は、爆笑する。

「アッハハ！ 色仕掛け！ そういうことになるんですね、初体験だな！」

「——……っ」

彼は、いつでも笑っている印象だった。むろん怪我をさせたことを詫びるときや、そのほかで真剣な顔をすることもあったけれども、基本的にはうっすらと微笑んだような表情でいる。おそらくは一種のポーカーフェイスだ。表情での表現は真逆だが、いどこだというあの社長が仏頂面でのいるのと同じ、他人に内心を読ませないための、つくりものの仮面。

それが、ふだんのノーブルさはどこへ行ったかという勢いで、大口を開け顔をくしゃくしゃにして笑っている。

「し、失礼します！」

自分も相当失礼なことを言ったが、寓護も大概な反応だ。真っ赤になって逃げようとする諒だったが、しかし機嫌良くにこにこしたままの寓護は、掴んだ腕を離さない。

どころか、ひっぱられてあっさりと抱きしめられ、諒はパニック状態になった。

「そうですね、うん、そうだ。聖のために色仕掛けをします」

「親馬鹿！ っていうかなんですかそれ！」

「あとわりとまじめにぼく自身が、あなたを気にしています」

耳元に落としこむように声を使うのは卑怯だと思う。瞬時に赤くなってもがけば、なおのこと腕を強くされた。

「しかし、いったいどこで惚れられたのか、聞いていいですか？」

「惚れ!? まだそこまでじゃありませんけど!？」

さすがに突き飛ばすような勢いで身を離し、距離をとる。だが寓護はソファ、こちらは床に座って、見下ろされるポジションになるのはいただけなかった。

「……『まだ』。なるほど」

笑いをこらえて喉を鳴らしながら復唱された。さらに顔が熱くなって、これはよくないほうの羞恥心からだ。

本当にこの男、殴りたい。睨んでみせればふっと笑みをほどこいた顔でじっとみつめられた。

「では後学のために、フックがどこにあったのかだけ教えていただければ」

「フックって」

「熱心にみつめていただいたので、なにかしらはあるのかと」

この男は完全に自分の顔の使い方を熟知していて、諒を陥落させようとしている。

頭上からの圧を感じる。わかっているけれど、人生でいちばんというくらいに好みの顔立ちでみつめられて、諒が耐えられたのはほんの数秒だった。

「か、顔がよくて……」

うなだれ、いつの間にか正座になった諒は、屈辱さえ覚えながらうなるように言った。そして

案の定、寓護は爆笑だ。

「顔！ アッハハハ！」

「そ、そこまで笑うことですか？」

「笑うことです……っふふ」

身を丸めて笑っていた寓護は、しばらく呼吸を整えてから諒を見る。

「顔、いいじゃないですか。ぼく自身を見てくれているのはたしかですから」

涙目の上目遣いにどきりとしたが、その目がさきほどまでと違い、なにか吹っきたような、安心したような色をしていることに気がついた。

（立場がすごすぎるひとだ。ひとりの人間として見られることのほうが、少ないのか）

テレビに出た姿を思いだす。大変だろうとは思うが、あまりに世界が違いすぎてなんといっているのかわからない。そもそもたいした語彙力もないし、気が利いたことを言える人間でもない。それでも、なぜか相手をおもしろく思えてしまって、なにかを言いたくてたまらない。

結果、絞り出した言葉はまたもや、脳直ストレート。

「……オプションが多いのも大変ですね」

「オプション！」

「だから、笑いすぎだと思えますけ——!？」

笑いながら、うっかりキスをされる。不意打ちもいいところで、でも長い腕があっという間に諒の顔を包みこんでしまったから、逃げる隙もなにもなかった。

（言い訳かも）

キスをしてもらいたかったのかもしれない。高い鼻や眼鏡があたらないよう、上手に顔を傾けてくれた男の唇は、見た目のどおり薄いけれどやわらかく、そしていつも使っている上質なフレグランスの香りがした。ラストノートと体温のまじったそれは、くらくらするほどにあまくて、溶ける。

ぼんやりとする諒に、フレグランスのそれよりさらにあまい声が唇をかすめて届く。

「いいですね、オプション。S B Nホールディングスが、ぼくのおまけか。……そんなこと言ったひと、はじめてですよ」

「た、単に言葉のあやというか——」

「それでも、とても気に入りました」

にっこり笑われ、もう一度キスをされる。さっきも、このいまも、深いキスではなかった。唇同士をこすりあわせるようにして軽く吸って離れる。それだけでじんとう唇が痺れた。

（あれこれ、なんかやばいやつ？）

欲しがらされている。そして完全に押し流しにかかってきている。わかっているのに、あまい匂いとあまいキスとあまい声が、流されてしまえとそそのかす。

「全力で色仕掛け、させていただきます」

「ちょいちょい、カッコワライが見えるんですけど……」

「気のせい、気のせい」

(いや、完全に声笑ってるじゃん)

思いつつ、またぎゅっと抱きしめられてしまう。なんだかそわっと浮き足立つ自分を感じて、
諒は戸惑うばかりだ。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<https://www.fwinc.jp/daria/>